

青年期から老年期に渡る理想 —現実自己のズレを調節する方略と アイデンティティとの関連

—過去の危機経験の影響に注目して—

松岡 弥 玲¹⁾²⁾

1. 問題と目的

生涯発達心理学研究では、年齢に伴って喪失が増加しているのに、人生満足度、自尊感情、well-beingなどの肯定的感情も同時に高まるという“パラドックス”が見出されている (e.g. Diner & Suh, 1997)。

Brandstädter & Rothermund (2002), Brandstädter & Renner (1990) は、このパラドックスを説明する一つの要因として、理想—現実自己のズレを減少させる方略の生涯発達変化が関わっていることを指摘している。彼らは、特に成人期後期から老年期に至る過程に焦点を当てて論じており、加齢による不可避の喪失が増加し、自己の限界性を自覚すると、理想を変えずにそれを追求しようとする方略 (assimilative coping) から、理想と隔たった現実の自分を肯定的に捉え、自分にとってより実現可能な有益な理想を設定しようとする方略 (accommodative coping) へと移行し、そのことによって well-being が維持されると述べている。

assimilative coping から accommodative coping への移行は、まず理想の追求に没頭できる時期 (assimilative coping) があり、その後加齢に伴い徐々に資源が減少してくると理想の実現可能性が脅かされ、理想・目標と現実の自分との隔たりが意識される (assimilative coping と accommodative coping とが葛藤する時期)。そして、現実の自分についての見直しが行われ、理想・目標は自分の資源 (人生の残り時間、健康、社会的支援、肉体的なスタミナなど) に合わせたものへと再体制化される

(accommodative coping)。

Brandstädter らは理想を実現させるための資源 (人生の残り時間、健康、社会的支援、肉体的なスタミナなど) が十分な青年期においては、理想—現実自己のズレを減少させるのに、assimilative coping が有効であるが、加齢に伴い、資源が喪失していく変化の中では、理想の追求は抑うつを生むことにつながるため、assimilative coping から accommodative coping へと一方向に移行し、そのことによって、well-being を保つことができると述べている。

松岡 (2006) では、理想—現実自己のズレが assimilative coping (邦訳版因子名：粘り強さ) によって減少する時期と accommodative coping (邦訳版因子名：肯定的解釈) によって減少する時期とが交互であることが示された。この結果は、年齢に伴って単純に assimilative coping から accommodative coping へ移行するという Brandstädter らの見解とは異なるものであり、方略の移り変わりが成人期後期以外でも行われている可能性を示したものである。

Brandstädter & Rothermund (2002) が assimilative coping と accommodative coping の移行のきっかけとして指摘しているものは、自己の限界を感じ、これまで抱いていた方向性では自分を支えきれなくなり、新たな方向性を見出す必要性が生じる経験、つまり「危機」である。これはアイデンティティ危機から新たにアイデンティティを再体制化するプロセスと重なる。ゆえに理想—現実自己のズレを減少させる方略とアイデンティティ危機とは深い関係があると想定され、検討する必要がある。

成人期後期から老年期への移行期は、生物学的、心理学的、社会的に大きく変化する時期である。この時期、青年期に形成したアイデンティティでは自己を支えられなくなり、新たにアイデンティティを再体制化する必要に迫られる危機の時期とされる (岡本, 2002)。この危

- 1) 本研究は2007年度に名古屋大学大学院教育発達科学研究科に提出した博士論文の一部を改訂したものである。
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生 (指導教官：速水敏彦教授)。

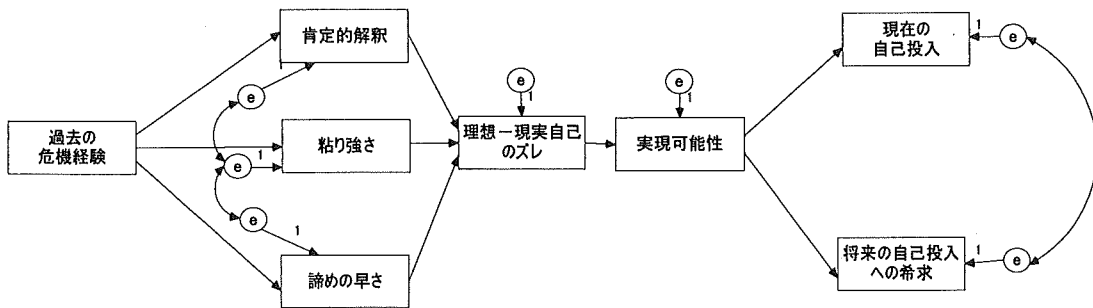


Figure 1 初期モデル (肯定的解釈は accommodative coping, 粘り強さ, 諦めの早さ assimilative coping である)

機は、自己を再度見直し、現在の自分に新たな方向性を見出すことによって、克服することができる。

人の生涯が、危機的な時期と、安定した時期といった質の異なる時期が繰り返しながら進んでいくことはこれまでにも指摘されており、古くは、Levinson (1978) が、人生は過渡期と安定期との繰り返しであることを指摘し、また、岡本 (1997) も、人生の節目、節目でアイデンティティは組み替えられ、生涯に渡って、危機→再体制化→再生を繰り返し、ラセン型に発達していくと述べている。

Brandstädter & Rothermund (2002) は、方略が変化する要因として、成人期後期から老年期への移行に生じる資源の喪失を挙げているが、自己の方向性を見出す必要性に迫られる「危機」は、今日人生のさまざまな時期において生じるものである。ゆえに、成人期後期から老年期への移行期のみではなく、他の時期も対象として、危機経験が理想—現実自己のズレの調節方略に影響を及ぼすのか、その影響が年齢によって異なるのかを検討する必要がある。Brandstädter は理想—現実自己のズレを減少させる方略と様々な年齢で生じるアイデンティティ危機との関連については扱っていない。また松岡 (2006) では、ズレを減少させる方略とズレとの年齢変化については捉えたが、方略に影響する要因については検討するに至っていない。そのため本研究では、理想—現実自己のズレを減少させる方略の先行要因として危機の経験を想定し、方略とアイデンティティとの関係について検討する。また本研究では、方略が理想—現実自己のズレを減少させ、実現可能性を高め、その結果アイデンティティへと影響するというモデルを検討する。ズレと適応との関連について扱う上では、自分の掲げる理想自己の実現可能性をいかに捉えているのかという点が必要となり (水間, 1998)、ズレの大きさが直ちに適応を低下させるとはいえない。現実の自分を大きく越える理想を持ち、理想—現実自己のズレが大きくても、その実現可能性を

個人が高く見積もっている場合、そのズレの大きさは適応を損なう性質のものではないといえる。そのため、ズレが適応へと影響するプロセスには、実現可能性が媒介していると考えられる。

以上のことから、本研究では、理想—現実自己のズレを減少させる方略の先行要因として危機の経験を想定し、方略がズレと実現可能性を介してアイデンティティへとつながるモデルについて検討する (Figure 1)。

2. 方法

1) 調査対象者 15歳から86歳までの男女計865名(人数の内訳については、Table 2参照。さらに詳しい属性については松岡 (2006) を参照)。調査対象者を、高校生、大学生 (以上青年期群)、23—34歳 (成人期前期群)、35—44歳、45—54歳 (成人期中期群)、55—64歳 (成人期後期群)、65歳以上 (老年期群) の7つの年齢群をそれぞれ性別にわけ、計14群で検討した。

2) 質問紙の構成

①理想自己の測定 自由記述と研究者が用意した理想自己の項目を選択する方法のどちらも可能な状態 (空欄をもうけ、その脇に例を記載) で、理想自己 (こうなりたい自分) を5個表出させる形をとった。

②理想—現実自己のズレの測定 抽出された5つの理想自己それぞれについて現実自己とのズレを求めた。7件法。「全くあてはまっていない」7点～「非常にあてはまっている」1点として得点化。

③理想自己の実現可能性 抽出された理想自己それぞれについて将来どの程度実現できると思うか回答を求めた。7件法。「確実に実現できるだろう」7点～「全く実現できないだろう」1点として得点化。

④理想—現実自己のズレを調節する方略 松岡 (2006) で邦訳した Brandstädter & Renner (1990) の Tenacious Goal Pursuit and Flexible Goal Adjustment 尺度 (以下 TGP & FGA 尺度: accommodative coping の側面は肯定

Table 1 加藤 (1983) の同一性地位判定尺度の項目内容

項目内容	
「現在の自己投入」	
1	私は今、自分の目標をなしとげるために努力している。
2●	私には、特にうちこむものはない。
3	私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている。
4●	私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない。
「過去の危機」	
5●	私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。
6	私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということを、かつて真剣に迷い考えたことがある。
7●	私は、親や周りの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない。
8	私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。
「将来の自己投入への希求」	
9	私は、一生けんめいのうちこめるものを積極的に探し求めている。
10●	私は、環境に応じて、何をすることになっても特に構わない。
11	私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている。
12●	私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。

●逆転項目

的解釈因子, assimilative coping は粘り強さ因子, 諦めの早さ因子である)。

⑤アイデンティティ 加藤 (1983) の同一性地位判定尺度のうちの「現在の自己投入」, 「将来の自己投入への希求」に関する項目を用いた (Table 1)。6件法。「現在の自己投入」は、現在の目標の自覚とそれに向かう努力を示し, 「将来の自己投入への希求」は意欲と探索, 現在危機のさなかであるが将来の展望を持っている状態を示す。

⑥危機経験 ⑤加藤の尺度のうち「過去の危機」項目を用いた。6件法。

3. 結果

1) モデルの検討 多母集団同時分析 Figure 1のモデルについてAmos7.0を用いて, 多母集団同時分析を行った。その結果, 適合度は, χ^2 値が899.7 ($p < .001$), RMSEA .042, GFI.892, AGFI .752, CFI.772であった。RMSEAの値は.05以下を示し, 初期モデルへのデータの当てはまりは問題ないと思われたが, GFIが.900以上という基準を満たしていなかった。

そこで, 修正指標の値を参考にしたところ, 粘り強さから現在の自己投入への希求へのパスを引くことで適合度が改善することが示されていた。修正指標を参考にパスや相関を導入する場合はそのパスに十分意味があり,

解釈できるものである必要がある (狩野・三浦, 1997)。「現在の自己投入」は, 自分が目標としているものに積極的に関与しようとするものであり, 「将来への希求」へは, 積極的に関与できる目標を捜し求めるものである。理想を追求することで理想-現実自己のズレを減少させる方略である粘り強さがこれらの変数に直接影響する可能性は十分考えられ, このパスは解釈が可能であり, 意味のあるものであると考えられたためこれを加えることにした。

その結果, 最終的なモデル (Figure 2) の適合度は, χ^2 値 が 664.5 ($p < .001$), RMSEA .037, GFI .912, AGFI .774, CFI .848であった。RMSEA, GFIの値は問題なく, 初期モデルよりも全ての適合度が改善されていたため, このモデルを受容することとした。

このことから, 過去の危機経験が方略に影響を与え, ズレと実現可能性を介して, 現在の自己投入, 将来の自己投入への希求へとつながるモデルが14群で同一の構造を持つことが示された。このモデルに対して行ったパス解析の結果をまとめたものがTable 2である。以下, 得られた結果について述べていく。

2) 過去の危機経験から理想-現実自己のズレを減少させる方略との関連 (P1, P2, P3)

過去の危機経験から理想-現実自己のズレを減少させる方略との関連は, 14群のうち9群で認められ, パス係

青年期から老年期に渡る理想—現実自己のズレを調節する方略とアイデンティティとの関連

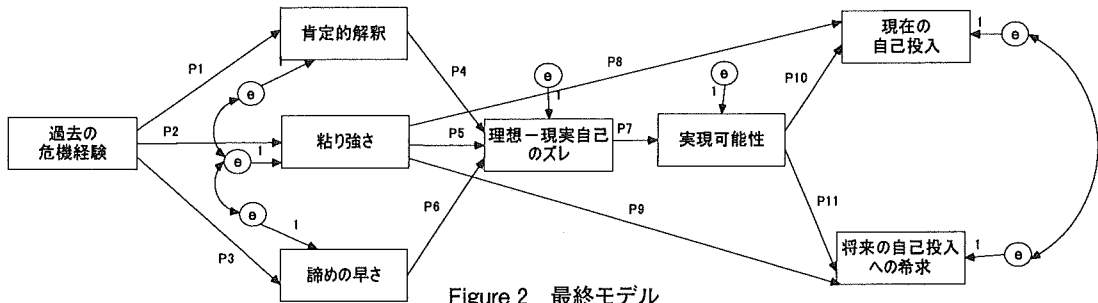


Figure 2 最終モデル

数の値は、女性では35-44歳群以外の全ての群で有意もしくは有意傾向であり、男性では、高校生、35-44歳群、45-54歳群で有意であった。

過去の危機経験は、55-64歳群の女性のみ、肯定的解釈に正の影響を示したが ($\beta = .43$)、その他の群では粘り強さに正のもしくは諦めの早さに負の影響を示していた (粘り強さへのパス係数 $\beta = .18 \sim .50$: 諦めの早さへのパス係数 $\beta = -.25 \sim -.37$)。粘り強さと諦めの早さは、理想を追求する assimilative coping の側面である。この結果から、過去の危機経験は、理想—現実自己のズレを減少させる方略に影響し、主に assimilative coping に関わることが示された。

3) 理想—現実自己のズレを減少させる方略からズレとの関連 (P4, P5, P6, P7)

理想—現実自己のズレを減少させる方略からズレへの影響は、松岡 (2006) と同様に、粘り強さによってズレが減少する群と ($\beta = -.27 \sim -.60$)、肯定的解釈によってズレが減少する群 ($\beta = -.20 \sim -.43$) とは交互になっており、65-86群の男女はどちらも方略からズレへのパス係数は有意ではなかった。この結果と、2) で示された結果とあわせてみると、過去の危機経験によって高められた方略が、必ずしもそのままズレの減少へと結びつくわけではないようであった。

高校生群の男性、大学生群の女性、45-54歳群の女性は、過去の危機経験によって粘り強さが高まっており、そのままズレの減少へとつながっていた。そして、54-65歳群の女性も、過去の危機経験によって肯定的解釈が高まり、それによってズレが減少していた。しかしながら、高校生群の女性は過去の危機経験によって諦めの早さが低められていたが、ズレへは結びつかず、同様に23-34歳群の女性、35-44歳群の男性、45-54歳群の男性は過去の危機経験によって粘り強さが高まっていたが、粘り強さによってズレは減少せず、肯定的解釈によって減少していた。

4) 理想—現実自己のズレと実現可能性との関連 (P7)

ズレと実現可能性との関連は、前節と同じく全ての群

でパス係数は有意であり、ズレが小さいほど実現可能性が高まる傾向がみられた ($\beta = -.37 \sim -.80$)。

5) 粘り強さ、実現可能性と現在の自己投入、将来の自己投入への希求との関連 (P8, P9, P10, P11)

また、粘り強さから現在の自己投入、将来の自己投入への希求に直接引いたパス係数は、全ての群で、少なくともどちらか一方は有意もしくは有意傾向であった (現在の自己投入 $\beta = .24 \sim .58$, 将来の自己投入への希求 $\beta = .18 \sim .51$)。このことから、粘り強さが直接現在の自己投入、将来の自己投入への希求へと影響していることが示された。

3) で述べたように、65-86歳群の男女では、方略からズレへの影響はみられなかったが、粘り強さから現在の自己投入と将来の自己投入への希求に引いたパス係数は、有意もしくは有意傾向であった。

実現可能性は、45-54歳群の男性を除く全ての群で現在の自己投入のうち少なくともどちらか一方とは将来の自己投入への希求に影響していた (現在の自己投入 $\beta = .19 \sim .47$; 将来の自己投入への希求 $\beta = .22 \sim .48$)。

また、実現可能性から将来の自己投入への希求へのパスは、高校生、大学生、23-34歳群では有意であったが、35-44歳群以降の全ての群で関係がみられなくなった。そして、65-86歳群の女性のみ、実現可能性は将来の自己投入への希求に負の影響を示していた。

4. 考察

本研究では、過去の危機経験が、理想—現実自己のズレを減少させる方略に影響してズレを減少し、実現可能性を高め、現在及び将来の自己投入へと至るプロセスに関するモデルを立てて検討した。多母集団同時分析の結果からこのモデルの当てはまりは問題ないことが示され、理想—現実自己のズレを減少させる方略とアイデンティティとを関連付けたモデルが支持された。

過去の危機経験から方略に対する影響は、男性では高校、23-34歳群、35-44歳群、女性では35-44歳群

Table 2 理想—現実自己のズレを減少させる方略がアイデンティティ形成に及ぼす影響 パス解析結果

年齢群	男性										
	過去の危機経験から方略へのパス			方略からズレへのパス			粘り強さからアイデンティティへのパス			実現からアイデンティティへのパス	
	P1 危機→ 肯定的解釈	P2 危機→ 粘り強さ	P3 危機→ 諦めの早さ	P4 肯定的解釈→ ズレ	P5 粘り強さ→ ズレ	P6 諦めの早さ→ ズレ	P7 ズレ→ 実現	P8 粘り強さ→ 現在自己投入	P9 粘り強さ→ 将来自己投入	P10 実現→ 現在自己投入	P11 実現→ 将来自己投入
高校	.09	.05	-.25*	-.14	-.45***	-.03	-.45***	.35*	.12	.19†	.11
大学	-.13	.27*	-.26*	-.08	-.60***	.16	-.60***	.28*	.34**	.20**	.24***
23-34	.16	.18†	.01	-.33**	-.22	.14	-.53***	.23*	.21*	.33***	.35***
35-44	-.17	.18	-.17	-.06	-.44***	.17	-.58***	.38***	.01	.21†	.43***
45-54	-.02	.32**	-.25*	-.16	-.32*	.07	-.56***	.41***	.39***	.28*	.22†
55-64	.43***	.24	.08	-.43**	-.23	-.20	-.58***	.44***	.39***	.47**	.23
65-86	.25	.07	-.37*	-.23	-.15	.14	-.62***	.30†	.21	.16	-.30†

年齢群	女性										
	過去の危機経験から方略へのパス			方略からズレへのパス			粘り強さからアイデンティティへのパス			実現からアイデンティティへのパス	
	P1 危機→ 肯定的解釈	P2 危機→ 粘り強さ	P3 危機→ 諦めの早さ	P4 肯定的解釈→ ズレ	P5 粘り強さ→ ズレ	P6 諦めの早さ→ ズレ	P7 ズレ→ 実現	P8 粘り強さ→ 現在自己投入	P9 粘り強さ→ 将来自己投入	P10 実現→ 現在自己投入	P11 実現→ 将来自己投入
高校	.111	-.20*	-.26***	-.20**	-.27***	-.05	-.54***	.38***	-.24***	.05	.25**
大学	-.10	.05	-.09	-.39***	.04	.20	-.37***	.24*	.18†	.37***	.32**
23-34	.17	.12	-.15	.14	-.42**	-.09	-.60***	.58***	.34**	.11	.48***
35-44	.13	.50***	-.06	-.29*	-.18	.05	-.58***	.46***	.22	.26†	.22
45-54	.11	.33*	-.14	-.35*	-.25	-.13	-.67***	.30†	.31†	.14	-.13
55-64	-.08	.26	-.06	-.31	-.40***	.05	-.75***	.41***	.51***	.35*	.21
65-86	.04	-.17	-.20	.02	-.34	-.14	-.80***	.54***	.37***	.29†	.18

† .05<p<.1 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

Table 2 (続き) 理想—現実自己のズレを減少させる方略がアイデンティティ形成に及ぼす影響 パズ解析結果

男性											
年齢群	n	決定係数				誤差相関					
		肯定的解釈	粘り強さ	諦めの早さ	ズレ	肯定的解釈× 粘り強さ	肯定的解釈× 諦めの早さ	粘り強さ× 諦めの早さ	現在自己投入× 将来自己投入		
高校	111	.00	.04	.07	.13	.29	.16	.14	.23*	-.39***	.47***
大学	89	.01	.00	.01	.17	.13	.21	.14	.36**	-.33**	.35**
23-34	51	.03	.01	.02	.11	.36	.38	.41	.45***	-.46**	.46**
35-44	43	.02	.25	.00	.15	.33	.32	.11	.22	-.39**	.55**
45-54	40	.01	.11	.02	.24	.45	.14	.10	.44**	-.58**	.72***
55-64	31	.01	.07	.02	.37	.57	.41	.39	.50*	-.20	.38†
65-86	31	.01	.03	.04	.13	.63	.46	.21	.36	-.34	.78**
女性											
年齢群	n	決定係数				誤差相関					
		肯定的解釈	粘り強さ	諦めの早さ	ズレ	肯定的解釈× 粘り強さ	肯定的解釈× 諦めの早さ	粘り強さ× 諦めの早さ	現在自己投入× 将来自己投入		
高校	89	.01	.00	.60	.14	.14	.18	.03	.35***	-.37***	.41***
大学	69	.02	.07	.07	.34	.34	.17	.25	.35***	-.61***	.51***
23-34	90	.03	.03	.00	.28	.28	.18	.18	.28**	-.30**	.39***
35-44	68	.03	.03	.03	.34	.34	.24	.19	.53***	-.25*	.35**
45-54	66	.00	.10	.07	.18	.31	.33	.24	.35*	-.13	.37**
55-64	43	.19	.06	.01	.37	.34	.33	.24	.38*	-.11	.16
65-86	41	.06	.01	.14	.11	.39	.13	.12	-.02	-.17	.59***

† .05<p<.1 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

をのぞく全ての群でみられ、その影響は、55-64歳群の女性のみ肯定的解釈を高めていたが、それ以外の群では、理想を追求しようとする粘り強さ、諦めの早さ (assimilative coping) に影響を与えていた。これは、過去思い悩んだことのある経験は、むしろ理想を追求しようとする方略を高めていることを示しており、非常に興味深い知見である。岡本(2002)は、成人期のアイデンティティ発達について、危機をどう受け止めるのかという点を重要視しており、いかに深く自己の内的危機を認知するかということが、心の発達にとって重要なポイントであると述べている。

しかし、過去の危機経験が影響を与えた方略がそのまま現在の理想-現実自己のズレが減少するかというと、必ずしもそうではないことが示されていた。過去の危機経験によって高まった方略がそのままズレを減少することにつながっていたのは、高校生群の男性、大学生群の女性、45-54歳群の粘り強さ、54-65歳群の女性の肯定的解釈であり、高校生群の女性の諦めの早さ、23-34歳群の女性の粘り強さ、35-44歳群の男性、45-54歳群の男性の粘り強さは、過去の危機経験によって影響を受けていたが、この方略によってズレは減少せず、別の方略によって減少していた。これは、過去の危機経験によって高められた方略が、現在抱いている理想-現実自己のズレを減少させるような性質を持たない場合があるということを示している。

この結果は、過去の危機をどのようにして乗り越えてきたのかによって、ズレと関連する方略が変化した結果として捉えられるかもしれない。すなわち、過去の危機の経験によって粘り強さが高まるという結果は、過去に理想を追求する形で危機を乗り越え、その成功経験が影響しており、また、肯定的解釈が影響していた場合は、過去の危機は現実を受容する形で乗り越えられる性質のものであったのかもしれないということである。この結果は、個人が経験した過去の危機と現在の状態との質が異なる可能性や、群によって過去の危機として想定しているものが異なり、その違いが影響している可能性がある。今回は過去の危機の質についてまでは扱っておらず、明確な解釈ができないがこの点は非常に興味深い点であり、今後の検討が求められる。

また、理想-現実自己のズレから実現可能性への影響は、すべての年齢群でみられた。そして、実現可能性は、現在の自己投入と将来の自己投入への希求のうちどちらか一方には影響していた。このことから、ズレが実現可能性を高め、実現可能性が現在もしくは将来の自己投入に影響を与える過程は年齢と性を越えて共通していることを示唆している。

ただし、ほとんどの群で実現可能性は将来の自己投入への希求に対して正の影響を示していたのに対し、65-86歳の女性のみ、実現可能性が将来の自己投入への希求にマイナスの影響を示していた。将来の自己投入への希求は、危機のさなかであり、将来の自分がコミットできるような目標を模索中の状態をさしている。つまり、65-86歳群の女性では自分の理想を実現可能だと思うほど、将来の自己を探求しないことになる。また、同年齢である65-86歳群の男性では実現可能性が現在の自己投入へ影響している傾向があるが、65-86歳群の女性は、実現可能性から、現在の自己投入への影響もみられなかった。これらの結果からは、65-86歳群の女性が持つ理想自己が他の年齢群のものとは性質が異なり、その実現は現在の自分の探求とも関係せず、将来の目標を探し求めるようなものでもないことが示された。老年期の女性の理想自己の性質が顕著に他の群と異なることは興味深い。老年期の自己概念を扱った下仲・中里(1999)では、過去の自己と現在の自己を肯定視し、将来の自己については広がり期待するよりも死を最終ゴールにしていること、女性は男性と比べ、現在の自己に対する見方が肯定的であることについて述べているが、老年期の理想自己の性差については研究が乏しく、今回の調査対象者のみでみられた傾向であるのかの判断ができない。今後老年期の理想自己の性質について性差を含めての検討が求められる。

引用文献

- Brandstädter, J., & Renner, G. (1990). Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment: Explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging*, 5, 58-67.
- Brandstädter, J., & Rothermund, K. (2002). The life-course dynamics of goal pursuit and goal adjustment: A two-process framework. *Developmental Review*, 22, 117-150.
- Cross, S., & Markus, H. (1991). Possible Selves across the Life Span. *Human Development*, 34, 230-255.
- Diener, E., & Suh, M. E. (1997). Subjective well-being and age: An international analysis. In K. W. Shaie & M. P. Lawton (Eds.), *Annual review of gerontology and geriatrics*, 17, New York: Springer, pp. 304-324.
- 狩野裕・三浦麻子 (2003). グラフィカル多変量解析一目で見る共分散構造分析—増補版 現代数学社.
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.

- (Kato, A. (1983). A study of identity statuses and their structure in university students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 31, 292-302.)
- Levinson, D. J. (1978). *The season of man's life*. New York: Alfred A Knopf. (南博訳 (1992). ライフサイクルの心理学上・下 講談社学術文庫)
- 松岡弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— *教育心理学研究*, 54, 45-54. (Matsuoka, M. (2006). Ideal self across the life span: Roles and regulation process — *Japanese Journal of Educational Psychology*, 54, 45-54.)
- 水間玲子 (1998). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について *教育心理学研究*, 46, 131-141. (Mizuma, R. (1998) A Study of Relationship between an Ideal Self and Self-Esteem, and Consciousness to self-Formation. *The Japanese Journal of Educational Psychology*, 46, 131-141.)
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子 (2002). 女性の生涯発達とアイデンティティ個としての発達・かかわりの中での成熟 北大路書房
- 下仲順子・中里克治 (1999). 老年期における人格の縦断研究—人格の安定性と変化及び生存との関係について— *教育心理学研究*, 47, 293-304. (Shimonaka, Y., & Nakazato, K. (1999). Personality in old age: Longitudinal study of personality change, ego function, and survival. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 47, 293-304.)

(2008年11月5日受稿)

ABSTRACT

Relationship between coping that reducing actual-ideal discrepancy and identity formation from adolescent to old adults

: focusing on experience of crisis in the past

Mirei MATSUOKA

The objective of the study was to investigate that coping of reducing actual-ideal discrepancy (assimilative coping and accommodative coping) related to identity formation from adolescent to old adults. This model assumed that coping styles were influenced by the experience of crisis in the past. A cross sectional sample of 865 participants age 15 to 86 years completed questionnaires. The result from multiple population analysis showed the experience of crisis in the past enhanced assimilative coping (tenacious goal pursuit) in some groups (9 of 14 groups). But the coping style enhanced by crisis didn't always reduce the discrepancy between ideal and actual self.

Key words: coping, discrepancy between ideal and actual self, identity, life-span development